

『後拾遺集』における「雑二」の特性をめぐって

実川 恵子

『後拾遺集』の巻十六「雑二」は、いわゆる恋歌と称される六八首の詠歌が収集されている。この「雑二」巻について、『拾遺集』の「雑恋」の影響下にある点や、その作者には女流人詠が多いことなど、更にこの「雑二」の性格については、男女間がかれがれになつた嘆きや怨みの歌を集めた特殊性を有する巻であり、破れた恋の「あはれ」を主張した部立であるという見解¹を述べた事がある。

しかし、その後改たに読み進んで見ると、「雑二」は、「恋歌」という範疇とは又別の異質な要素を保持していると思われる点や、当巻には特異な編集意図が働いているようにも感得される。本稿では、これらの疑問を起点として「雑部」の二巻目に収集し、部立を構成させた「雑二」巻の特性や存在の意義などについて、今一度考察してみたい。なお文中で引用した本文は、『新編国歌大観』に拠る。ただし、表記については私に改めたところもある。

一

先行勅撰集である『拾遺集』は、巻八、九を「雑上」「雑下」とし、巻十六より四巻をそれぞれ「雑春」「雑秋」「雑賀」「雑恋」として計六巻を配置する。雑部六巻という数量は、『後拾遺集』と同様だが、分散して布置する『拾遺集』よりは巻末に六巻をまとめ置いている点では、『後拾遺集』は構成力の面ではまさっている。『後拾遺集』の

「雑二」は、この巻十九「雑恋」の継承であろうし、また部立構成の面でも『後拾遺集』は『拾遺集』の影響を大いに受けているものであると思われる。そこでまず、『拾遺集』の「雑恋」との比較において述べてみたい。

『拾遺集』の「雑恋」は、『古今集』や『後撰集』の部立構成とは異なつた「雑春」以下四巻の特異な巻の存在そのものが一つの特性であるかのようだが、これらは母胎となつている『拾遺抄』の「雑上・下」から分離し、独立したものであるというところの方がなされている。また雑部を細分化し、他の正統部立とも区別しようという意識も認められる。

『拾遺集』の「雑恋」の入集歌数六四首のうち、約半数がよみ人しらず詠である。次いで多いのが、貫之八、人磨六、国用二首と男性歌人が多くを占め、この傾向は『拾遺集』全体の歌人構成に似る。この点、『後拾遺集』では圧倒的に和泉式部や相模、馬内侍等の女流歌人詠が多く、入集歌人の側面からは、両集に大きな相違点を認めることができる。また詞書記載やその内容について概観すると、『拾遺集』では全体に簡略な記述が目立ち、そのうちでも「題しらず」歌は十八首（二八パーセント）と多い。これに反してその詠歌事情や場、または人物名などを明瞭に示し、詠歌状況の固有性や事実性を表わそうとしている詞書記載例は少ない。その例歌は次のようである。

貞盛がすみ侍りける女に、国用がしのびて通い侍りけるほど

に、貞盛もうで来ければ、まどひてぬりごめに隠して後の戸より逃がし侍りけるつとめて、いひつかはしける 国用

1226 宮つくる飛驒のたくみのてをの音ほとほとしかるめをも見しかな
詳細に叙述された詞書の詠歌事情は、歌の場面や内容にふくらみを持たせ、歌中の序詞や掛詞を用いた和歌的表現の効果を引き出している。しかも、そこには滑稽味をも感じさせている。また、この他にも、

一条摂政下らふに侍りける時、承香殿女御に侍りける女にしのびて物いひ侍りけるに、さらになとひそといひて侍りければ、契りし事有しかばなどいひつかはしたりければ

本院侍従

1263 それならぬ事もありしをわすれぬといひしばかりを耳にとめけんの詠歌なども、一首の独立性に欠け、詞書の記述内容に依存しなければ、「雑恋」の部立に入集する根拠をも示さない歌である。

次に、特異と思われる記載例を掲出すると、

流され侍りける時

贈太政大臣

1216 あめのしたのがるる人のなればやきてしぬれぎぬひるよしもなき

うきしま

順

1249 定めなき人の心にくらぶればただうきしまは名のみなりけり

などは、きわめて暗示的な句や語によって、詞書記載がなされており、歌独自に詠歌内容を許容する要因がないために、非常に観念的な詠歌になっている。こうした例は、『後拾遺集』には一例もなく、撰集意識の相違点が見い出せるのではなからうか。

次に掲げる例も『後拾遺集』には見られない現象である。

仁和御屏風に、あましほたるる所につるなく

大中臣頼基

1247 しほたるる身は我とのみ思へどもよそなるたづもねをぞなくなる

延喜御時中宮屏風に

貫之

1266 いづれをかしるしとおもはむみわの山有りとしあるはすぎにぞあり

ける

三条右大臣の屏風に

貫之

1272 玉もかるあまのゆき方さすさをの長くや人を怨渡らん
詞書から、屏風歌であることがわかる。極めて多くの屏風歌を入集している『拾遺集』では、こうした屏風歌の類型的表現が一般化し、固定化していくのであろう。

概略的にはあるが、『拾遺集』の「雑恋」巻の特性について述べてみた。『後拾遺集』が継承したと言われる「雑恋」ではあるが、作者や詞書記載の問題やその詠歌内容については明確に相違点が見い出せる。雑部という日常性の反映の多面的な主張が、「雑恋」や「雑二」の布置につながったのであろうが、この両集の意図は必ずしも同傾向ではないようである。そこには、別途な編集意識が働いているように思える。そこで次項では、これらを踏まえて『後拾遺集』の「雑二」の詠歌を具体的に見ることにしたい。

二

「雑二」の冒頭は、次の三首の歌群からはじめられる。

入道撰政、よがれになり侍りける頃、くれにはなどいひおこせて侍りければいひつかはしける

大納言道綱母

904 かしはぎのもりのしたくさくれごとになほたのめとやもるをみる

みる

来むといひてこざりける人の、くれに必ずといひて侍りける返りごと

馬内侍

905 まつほどのすぎのみゆけば大井川たのむるくれをいかごとぞ思ふ
女の許にくれにはと男のいひつかはしたる返りごとに読み侍

ける

読人不知

906 あざきせをこす筏士のつなよわみなほこのくれもあやふかりけり
これらの三首は詞書と歌に「くれ」という語を詠んでいる点で共通している。「くれ」の語は、日暮れの意を示す「暮」(904)や、皮のついたままの材木である「樽」(「暮れ」の掛詞、905 906)を意味するが、同時に、恋愛での「暮」をも意味するものではなからうか。

一様に、来ぬ人に対する恨みの感情を表白した三首に象徴されているように、交りを結んだ後の男女の愛情が、破局に向って傾斜を示す時、通い馴れた男の足が女のもとから遠のいていく。男を待つ女からすれば、その思いは女の期待を裏切つて、我が許に通つて来ない人が恨めしく、やるせなさは鬱積する。そうした感情はつゝのり、相手に対しての怨みの気持からやがてそんな思いに悩まされている自分に対して述懐する。そしてそれが女のみじめさからあはれを呼び起こすといった人間の恋に対する無常を説いた構成法をとっているようである。

冒頭の904の道綱歌は、『蜻蛉日記』上、天曆八年九月条の兼家との新婚時代の贈答歌四首のうちに見られるが、同じ道綱歌の、

消えかへり露もまだひぬ袖の上に今朝はしぐるる空もわりなし
は、「恋」700に「入道撰政、九月ばかりのことにや、夜がれして侍ける、つとめて、文おこせて侍る返しにつかはしける」と詞書して入集する。『後拾遺集』が、『蜻蛉日記』を資料源にしたことはまず承認して良いだろうから、「消えかかり」の歌を「恋」に、道綱歌を「雑」に置いたある基準が撰者側に用意されていたのであろう。そのうえ、「雑」の主題を暗示すると思われる冒頭になぜこの歌が撰入されたのだろうか。

この一首は、詞書にも「よがれがちになりはべりける頃」とあるように兼家の足が遠のきはじめた頃に、「今夜は行くよ」と言いつけてきたことに対する道綱母の歌である。歌中の「柏木」は、兼家を指し、

そこから「森」の語が出て、兼家の庇護を受けている自分自身を「下草」に譬える手法をとっている。「もる」は「濡る」と「守る」の掛詞であり、また初句の「柏木の森」は、大和の歌枕とする(『五代集歌枕』・「八雲御抄」)。しかし、「柏木」は兵衛府の異称として詠まれることが多く、その「守」を掛けて「柏木の森」と続ける例は数首あり、『拾遺集』「雑恋」に、右近の歌として、

中納言敦忠、兵衛佐に侍りける時に、しのびて言い契りて侍りけることの、世に聞こえ侍りければ

人知れずたのめしことは柏木のもりやしにけむ世にふりにけりの歌などがある。当歌の場合は、地名と兵衛佐とを掛けているかどうかは明確にしがたい。

また、結句「もるをみるみる」は、(傍注)漸新な私的用語を用いている。一見すると、当歌は前述したような修辭に隠されていて、その調べは哀艶に思えるが、四句の「なほたのめとや」は相手に対して反問し、釈明を求めようなかなか強い語勢を含んでいるようにも感得される。また、この歌は修辭的技法を盛り込んだ詠法だが、いわゆる形式的な歌ではなく、むしろその技法が歌の裏側に存する心情を効果的に演出しているようでもある。上村悦子氏はこの歌について「王朝の人妻らしい風情が百パーセントうたわれた秀歌」と絶讃している。

次の905歌は、前後の「くれにはなどいひおこせて侍りける」を受けて、その返歌という形式を取っており、掛詞や縁語を駆使したその場にふさわしい応答になっている。三首目は、前の二首を総括するが如くその詠歌事情を要約するかのような詞書記載である。以上のようにこの一連の「くれ」歌は、修辭的技法による言葉の遊びから、歌の世界の連想による趣向のおもしろみが見られるようである。

最近とみに活況をおびてきた『後拾遺集』の歌風の問題をとらえた御論考の中に西端幸雄氏の興味深い指摘がある。それは、「けしき」という語の国語史上の問題を平安朝の和歌史との関わりに於て述べら

れたものだが、転換期に位置する『後拾遺集』の歌風をとらえて、叙景歌の増加を掲げ、『後拾遺集』から用いられるようになった「自然の様子や風景を客観的にとらえ包括的に表現する語」として「けしき」を考察されている。

その御論考で西端氏は、平安朝の散文作品に於ける自然描写について「『宇津保物語』や『蜻蛉日記』がその転換期に位置する」とし、「その自然描写は、皆無か、描写していたとしても無味乾燥な描写に留まっているのに対して、『宇津保物語』や『蜻蛉日記』あたりから、微細な点まで情趣あふれる描写を行なうようになったという点」を掲げ、『蜻蛉日記』の用語を「それまでの作品やそれ以後の作品とは異質なものを含んでいる。」とし、『蜻蛉日記』は「語性転換の契機となつた作品である」と論述されている。

こうした注目すべき問題を内在する『蜻蛉日記』の中の道綱歌を「雑二」冒頭に配置したのは、撰者の道綱歌への評価と、「雑二」の編纂意図になつた風情あふれる秀歌であつたためであると思われる。この冒頭歌群に続く歌は、

中間白通ひはじめ侍ける頃よがれして侍りけるつとめて、こよひはあかしがたくてこそなどいひて侍りければよめる

高内侍

907ひとりぬるひとや知るらん秋の夜をながしとたれかきみにつけつる

しのびたる男のほかかにいであへなどいひ侍りければ

新左衛門

908はるがすみたちいでむこともおほえずあさみどりなるそらのけしきに

為家朝臣ものいひける女にかれがれになりてのちみあれのひくれにはといひて葵をおこせて侍れば女にかはりてよみ侍りける

小馬命婦

909その色の草ともみえずかれにしをいかにいひてかけふはかくべき男の夜ふけてまうできて侍けるにねたりとききてかへりにければつとめてかくなむありしと男のいひおこせて侍りけるかへりごと

和泉式部

910ふしにけりさしも思はで笛竹の音をぞせましよふけたりとも

よひのほどまうできたりける男のとくかへりにければ

911やすらはでたつにたてうきまきの戸をさしもおもはぬ人もありけり

以上の五首は、どれもが待つ恋を主題にしたものである。907は、独り寝の秋の夜長を恨みをこめて来ぬ人に告げ、908では男の浮気なのを嘆き、909はかれがれになつた来ぬ人が葵につけて女の許に送つて来た。それに対して、我身ももはや葵のようではなくその色も見えず枯草になつてしまつたと恨みを込めている。また910は、君が来ると思えば夜更けて寝ても、寝ないで待つているものをと、来ぬ人に皮肉をいって送つた恨みの歌であり、911はあなたの来ない夜でも躊躇しないで積の戸をたてないで待つているという詠歌である。これらは一様にかれがれになつた恋人を心のどこかでは待つているという心情を吐露しながらも、その一方では自分から遠のいた来ぬ人の、移り変わる心に対する不満と恨みを述懐した歌ばかりを集合し、排列させているものと考えられる。

続いては、頼宗と小式部に代つて詠んだ和泉式部の贈答歌である。

小式部内侍のもとに二條前太政大臣はじめてまかりぬるときき

つつかはしける

堀河右大臣

912人しれずねたさもねたしむらさきのねずりの衣うはぎにをきん

返し

和泉式部

913ぬれぎぬと人にはいはむむらさきのねずりの衣うはぎなりとも

詞書の記述が示すように、頼宗が兄の教通が小式部の許に始めて通つたのを聞き、自分は前々から逢いたいと思つていたが、それをあら

わさなかつたと自分の気持を述べ、その歌に対して和泉式部の答えた歌は、あなたが二人の間を暴露してしまおうと言うのならいいですよ、濡れ衣と世間には申しませう、と開きなかつた詠みぶりである。頼宗歌の「ねたさもねたし」と言葉を重ねた用法には、一種独特な迫力も感じられる。

次に掲げる二首は、他人の情事を見あらわした歌だが、詞書の詠作事情なしには解釈の不可能な詠歌で、歌だけでは季節詠としても扱われかねない歌である。

平行親蔵人にてはべりけるにしのびて人のもとに通ひながら
あらがひけるをみあらはして 兵衛内侍

914 秋霧はたちかくせどもはぎはらにしかふしけりとけさみつるかな
実方朝臣の女に文かよはしけるを蔵人行資にあひぬとききて
この女のつばねをうかがひてみあらわしてよみ侍りける

左兵衛督公信

915 あさなあさなおきつつ見れば白菊のしもにぞいたくうつるひにける
心の争いを現実に見て、その感情を「萩はらにふした鹿」、「霜にうつらつた白菊」とそれぞれにうつろい遠のいた心を見あらわした嘆きや諦めが表現されているのであろう。

両者とも対象になる人名が記載され、またその情況が詞書に説明されることよって、914のように「鹿」に副詞の「しか」が掛けられ、平行親が暗示されていることを詠みとるのである。こうした詞書と歌とが、相互に不可欠な存在であり、詞書が解釈上の示唆を与えていることになる。詞書は、こうした私的な状況を簡潔に描写するが、歌はそれから一步遠のいて、季節歌としても理解しうるような自然に仮託した客観的な詠歌となる。つまり詞書によって享受者は作者の意図を汲みとる姿勢をとらされるわけである。詞書が具体的であればあるほど、歌の主張は逆に強くなるのではないだろうか。

このような歌に類似したものが、長文の詞書記載例で前述した『拾遺集』「雑恋」の国用の詠歌「宮づくるひだのたくみの」にある。詳細な詞書に語られた色好みの失敗談は、歌中の「ほとほとしかる目を見しかな」に表現されるように笑いを誘うような手法をとっている。藤平春男氏はこの歌を「一首の独立性に欠け詞書に依存した歌が、しかも艶笑コンツォの性格を持」つものと評価されている。この『拾遺集』歌と較べると、『後拾遺集』の二例は笑いを誘うというよりも、詞書の場面をより忠実に描写するという態度をとっているように思われる。またその詠歌の印象は、むしろ暗いイメージにつながっているようにも感じ取られるのである。

この後は、歌枕を歌中に詠み入れた五首が配列される。(――は歌枕。傍点筆者)

大江公資相模守に侍りける時、もろともかの国に下りて、
遠江守にて侍りける頃、忘れにければこと女をあてくだる
とききてつかはしける 相模

916 逢坂の関に心はかよはねど見し東路はなほぞ恋しき
女のもとにまかりたりけるに、あづまをさしいで侍りければ

大江匡衡朝臣

918 あふさかの関のあなたもまだ見ねばあづまのこともしられざりける

大納言行成、物語などし侍りけるに、内の御物忌にこもればとていそぎ帰りてつとめて、鳥の声にもよほされてといひおこせて侍りければ、夜ぶかかりける鳥の声は、函谷関のことによといひつかはしたりけるを、たちかへり、これは逢坂の関に侍りとあればよみ侍りける 清少納言

940 夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ
はらからなどいむんといふ人の、忍びてこんといひたるかへ

りごとに

相模

942 あづまぢのそのはらからはきたりともあふさかまではこさじとぞ
思ふ

橘則長、父のみちのくの守にて侍りける頃、馬に乗りてまかりすぎけると見侍りて、男はさもしらざりければ又の日つかはしける
相模

955 綱絶えてはなれはてにしみちのくのおぶちの駒を昨日みしかな
傍点を施したように、916を除いては、詞書中に記載された語句が歌中にも詠われている。このように歌枕を恋歌のなかに詠み込む例は、『後撰集』時代に序詞中に歌枕を入れて詠むという表現技法が一般化し、類型化する。その後『拾遺集』の時代に固定化されるという経過をとっており、それが女房達が地名というものに興味を抱き女房間で暗誦され、定着していったものと考えられている。このような前提を踏まえて、「雑二」の歌枕を詠み込んだ例歌を概観してみよう。前掲した五首中、三首が相模歌であるという事実注目したい。相模が、歌枕を使った詠歌の歌人として秀いでた才能を持ち、その評価をも受けていたらしいこともあったようである。相模詠の入集は、ある意図を持つようにも思われる。

この歌枕詠に見られる「逢坂」は男女が逢う、つまり契りを交すことを意味する。恋歌的な範疇で「逢坂の関」を越えるということは、逢うことの許されない男女が一線を越えて結ばれるということでもあった。前掲例の四首は『後撰集』の、
思ひやる心は常にかよへども逢坂の関越えずもあるかな(恋一・公忠)

人知れぬ身はいそげども年をへてなど越えがたき逢坂の関(恋三・伊尹)

の古歌を踏まえている歌枕を、人事的な連想から詞書に叙述される特定の人物の心情までを表出させるという働きを持つものと思われる。

966、933 歌はその顕著な例であろう。また、938、942、955 は機知的な歌枕詠であり、誹諧的は傾向にあるといっても良いだろう。

このような歌枕詠は、この他「雑四」にも七首(1072、1077)が取られている。歌枕の増大が、後拾遺期を境に顕われはじめ、従来の歌枕観に変化が生じている事実も認められ、当時の歌人達にとっては歌枕を詠むことは多大な関心事であったことも推察されるであろう。

以上のように、「雑二」の歌枕詠は、詞書から誘発される場面や人物が、歌枕を詠むことで一つの文学空間の拡がりをより強調しているようでもある。

こうした内容や技巧を織り込んだ「雑二」巻の巻末は次の歌で終わっている。

題不知

藤原元真

970 うきこともまだしらくもの山のはにかかるやつらき心なるらん

斎宮女御

971 風吹になびくあさぢはわれなれや人の心の秋をしらす

「雑二」の入集歌中、「題不知」歌はこの巻末の二首のみである。970の元真歌は、歌中の「うきこと」、「かかるやつらき心」とは具体的には何を示すのかは作歌事情が不明で漠然としている。あえて「雑二」の巻末に置く意義をなさない歌のようである。推量するにこの「うきこと」は男女間の心のもの憂い状態をいうのであろう。また、次の斎宮女御の歌は、「人の心の秋」に斎宮女御自身の憂いの様相を感じとることができ、『拾遺集』「雑恋」終末の一連の貫之歌である

題しらす

ひとりして世をしつくさば高砂の松のときはもかひなかりけり

三条右大臣の屏風に

玉もかるあまのゆき方さすさをの長くや人を怨渡らん

年のをはりに、人まち侍りける人のよみ侍りける

たのめつつ別れし人をまつほどに年さへせめてうらめしきかな

の排列にも少なからず影響を受けているものと思われる。

三

「雑二」に女流歌人詠の多い事実は、周知のことであるがなかでも和泉式部や相模、馬内侍の詠歌が多く入集する。この三歌人の各部立毎の採録状況を表Iに示した。

和泉式部、馬内侍は「雑二」に、また相模は「恋四」に入集歌数が多い。また和泉式部は、「恋四」を上回る数を「雑二」に入集する。なぜ「雑二」に多くの和泉式部歌を採択したのだろうか、そしてその特性はいかなるものかを中心に考察していきたい。

「雑二」の十三首の和泉式部歌の詞書には、対象となる人名(固有名詞)の記載がなく、「男」(920 921 926 927 928 951)、女(928)、人(925 927 964 965 968)という三人称や、抽象的な詠歌状況しか示さない記述になっている。この現象は、場や人名などを詳細に記した詞書から考えられる詠歌状況の固有性や事実性を表わそうとする「雑二」全体の傾向とは対照的に、享受者側の読みの範囲を広くする許容力がある。対象となった人物などに対して、明確に特定の人名を詞書に記載するか否かは、

享受者側の鑑賞面に何らかの制約があるはずである。こうした点では、和泉式部歌に対してよく言究される詞書記載の態度や形態が、ある特異な要素を有するようにも思われる。

十三首の和泉歌は、910-913 (912は堀河右大臣詠、913は小式部の代作の返歌)の四首、920 921の二首、925-928の四首、951、964 965の二首、968と数首ずつが比較的まとまった形で入集している。同じ歌人詠を集合させるというのは、その歌人特有の主張を強調させることではなかっただろうか。

910から913の一連の和泉歌は、

男の夜ふけてまできて侍りけるに、ねたりと聞きてかへりければつとめてかくなむありしとをこのいひおこせて侍りけるも
 910 ふしにけりさしおもはでふえたけのおとをぞせましよふけたりと

よひのほどまうできたりけるをとこのとくかへりにければ
 911 やすらはでたつにたてうきまきのとをさしもおもはぬ人もありけり

かへし(912堀川右大臣への返歌)
 913 ぬれぎぬと人にはいはむむらさきのねずりの衣うはぎなりとも

(表I)

	馬内侍	相模	和泉式部	作者部立
11	1	0	10	春上下
4	0	3	1	夏
5	0	1	4	秋上下
4	0	2	2	冬
0	0	0	0	賀
0	0	2	0	別
1	0	0	1	羈旅
7	0	2	5	哀傷
4	2	0	2	恋一
10	0	6	4	恋二
10	1	4	5	恋三
19	0	9	10	恋四
3	1	2	0	雑一
23	3	7	13	雑二
5	1	0	4	雑三
3	2	0	1	雑四
3	0	2	1	雑五
4	0	0	4	雑六
116	11	40	67	計

の三首である。歌の修辭的な構造を明瞭にするために便宜的に、掛詞にはく、縁語は——を付した。

910は、「伏し」「節」^か、「夜」「節」^よと掛詞で、「ふし」「よ」は竹の縁語を用い一首を創り上げている。詠歌事情は簡潔に叙述されるが、歌はこの状況から一步退いて、修辭的な技巧を用いた機知的なものに感じられる。911も戸の縁語の「さしも」が、副詞としてこの歌に効果的に働き、そこに「ひとふしのをかしさ」が認められる。

次の頼宗との贈答歌は、前に例歌として掲出したのでそれに譲るが、漸新な語句や新奇な表現を用い、表示内容は実に迫力のある詠歌である。

次は、

をとこのへだつることもなくかたらはんなどいひちぎりてい
かがおもほえけんひとまにはかくれてあそびもしつべくなん
といひてはべりければ

920 いづくにかきてもかくれむへだてたる心のくまのあらばこそあら
め

こむといひてただにあかしてけるをとこの許につかはしける
921 やすらひにまきのことこそはささざらめいかにあけつる冬の夜なら
ん

の二首で、920は詞書の「かくれ遊びもしつべく」から発せられる、「心のくまのあらばこそあらめ」という表現が、男の気持をあなどって、軽い皮肉であしらっている。また、921は「あけ」に「明け」「開け」を掛けており、「鎖す」「開け」は戸の縁語として用いており、待つ女のわびしく暗い情趣が詠われている。

ものへまかるとて人の許にいひおき侍ける

925 いづ方へゆくとはかりはつげてましとふべき人のある身とおもは
ば

しのびたるをとこのあめのふるよまうできてぬれたるよし

へりていひおこせてはべりければ

926 かばかりにしのぶる雨を人とはばなになれたる袖といふらん
人の許に文やる男を恨みやりて侍ける返りごとにあらがひ侍
りければよめる

927 空になる人の心にささがにのいかにけふまたかくてくらさん

男のものいひ侍ける女をいまはさらにいかじといひて後雨の
いたくふりけるよまかりけりとききてつかはしける

928 三笠山さしはなれぬといひしかど雨も夜にはおもひしものを

この四首は、いづれも恋の終盤の醒めた切なく、あきらめに近い思
いが歌われている。927は、前述した910や911に類似した詠歌である。
また928の、三笠山とは何を意味しているのかは判然としないが、「笠」
と「さす」とか縁語関係になっている。歌全体が二人の対話による発
語を組みあわせて構成されたという点は、注目される。

964、965は、

久しう音せぬ人の、山吹にさして日比の罪は許せといひて侍
りければ

とへとも思はぬ八重の山吹をゆるすといはば折りに来んとや
おなじ人の、物よりきたりとききて、おなじ花につけてつか
はしける

あぢきなく思ひこそやつれづれとひとりやるでの山吹の花

965 歌詞書の「おなじ人」は、前歌の「久しう音せぬ人」をいうので
あるが、家集での詞書記載とはかけ離れていて、どうしてこのよう
に表記したのかは不明である。山吹は、『古今集』「誹諧歌」の中の素
性法師詠に、

山吹の花色衣主やたれ問へど答えず口無しにして

があり、無言の象徴とする。最後の968歌は、

門おそくあくとかへりにける人の許につかはしける

968 ながしとてあけずやはあらん秋の夜は待てかし槿のとはかりをだ

に

と、これらは和泉独特の恋の手法の典型的な詠風なのであろう。

雑駁ではあるが、和泉の「雑二」歌の特性らしきものを述べたが、和泉の個性的で独特な表現の創造が、この十三首の随所に顕われており、「雑二」の入集筆頭歌人に掲げられた評価もこうしたところにあったのかも知れない。

四

「雑二」巻は、本来の恋の部とは異なつた特異な編纂意図を持つて排列されているものと考えられる。その顕著な現象は、前述したような詳細な詞書である。詠作事情や場、またその対象となる人物名を詞書に記述することは、歌と詞書が不即不離の関係を有し、歌にある限定した詠みを許容することになる。ごく概観的にとらえたが、この詞書の指示内容の比重が、物語的な要因として引きずられていくと「後撰集」のような歌物語の範疇となり、また逆に歌自体に比重がかかってくると「金葉集」や「詞花集」などのような題詠化へと進行するものであろう。

しかし、「後拾遺集」は、「拾遺集」以後八十年という空白期に様々な和歌に対する試みが歌人の間で行なわれたのであろう。和歌が、歌本来の感情の窮まりによって詠出されるものという觀念がしだいにくずれ、美意識という枠を越えた一つの課題が生じて来たのではなからうか。そうした試みが、この「雑二」に見られるような言語を媒介とした表現機能の問題なではなかつたか。そして詞書に示される限定された世界を詠むという一種の技巧的な試行が、この「雑二」に集約されたのであろうか。しかし、これは誹諧歌や物名歌のような性格の歌ではなく、極めて真摯な姿勢で詠むという態度である。またその上に、和泉式部をはじめとした馬内侍の歌に見られるような独特な用語

や漸新な修辭を用いた詠歌には、女流歌人の新しい視点を荷つた恋歌的な詠歌を増大させた大きな意義があつたのではなかつただらうか。

「拾遺集」の「雑恋」の継承であるといわれる「雑二」という巻は、全体に一種独特なたゆたいが感得され、その色調もどちらかといえば暗いイメージが流れているようでもある。そうした意味で、「雑部」の二巻目に布置されたのかも知れない。日常的でしかも恋歌的な表現技法こそが、この期の女流歌人等が新たに創り上げたものなのではなからうかと思うのである。

〔注〕

- (1) 拙稿「後拾遺集」の雑歌をめぐって」(立正女子大学短期大学部研究紀要) 10号・昭50・12)
- (2) 上野理氏「後拾遺前後」第五章「後拾遺集の資料」(笠間書院)
- (3) 「二冊の講座 蜻蛉日記」(有精堂)
- (4) 「けしき」と後拾遺集」(国語学) 112
- (5) 神尾暢子氏「伝統用語の語性転換——冬こもり」から「冬こもるへ」(学大国文) 19号)
- (6) 鑑賞日本古典文学「古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集」の頃
- (7) 百目鬼恭三郎氏「後拾遺時代における歌枕の創出」(大妻国文) 15)
- (8) 武田早苗氏「後拾遺和歌集の四季歌・恋部の構成について」(国語研究) 2号、昭59・3)に「恋四」の特殊性について述べておられる。
- (9) 寺田透氏「日本詩人選8「和泉式部」措辞の特異さ」項。
- (10) 和泉式部にも影響を及ぼしたと言われる馬内侍詠にも言及したかったが、紙幅の都合上省いた。後日改たに考察したい。